

近道をするな  
正しい道を行くことだ

◆剣道◆

## 井上 正孝氏



\*プロフィール\*

井上 正孝(いのうえ まさたか)  
明治40年生まれ。福岡県出身。  
旧制朝倉中学(現朝倉高校)から昭和4年東京高等師範学校(現筑波大学)に進む。昭和8年高師卒業後は福岡の筑紫中学(現筑紫丘高校)や大阪の北野中学(現北野高校)の教員に。  
その後、大阪府武道主事、福岡市体育主事兼平和台総合運動場長、大阪市立医科大学学生課長、大阪市体育課長、大阪市立修道館長、東海大学教授、全日本剣道連盟常任理事などを歴任。玉川大学剣道部名譽師範、全日本学校剣道連盟顧問を務めた。  
剣道範士、居合道教士。  
平成15年7月逝去。享年96歳。

「宮本武蔵は、六十歳にして、剣道のすべてがわかったといっている。私は、九十を過ぎてやっと、こうであろうかと、模索する道がわかったところですよ」

剣道界のご意見番、剣道範士・井上正孝氏は明治四十年生まれの九十六歳。

十三歳で剣道を始めてから、八十有余年。

人生と共に歩んだ剣道の、今昔を聞いてみた。

## 箱根駅伝、山登りの五区を完走

——剣道を始めたきっかけは何だったのでしょうか。

「中学校が、非常に剣道が盛んな学校で、正課の授業でみんな剣道をやったんです。福岡の朝倉中学といって、今でも続いている玉竜旗大会で優勝したことのある中学でした。秋に、学校の大会で八人抜きをしたんですよ。それで剣道部の大将から『剣道部に入れ』と。剣道部の大将が学校の大将でしたから、『はい』と言うしかなかったんです」

自然と剣道の道へ。井上先生が剣道を始めた頃は、「撃剣<sup>げっけん</sup>」と言っていたと懐かしむ。

中学では、剣道の前から陸上競技をやっていて、中距離走では九州で一番だったという。剣道と陸上の両立は、東京高等師範学校に進んでも続いた。



東京高等師範学校入学当時

「剣道の稽古が終わってから、一人で陸上の練習をしました。寮のある大塚から飛鳥山まで走ってたんですが、それでも、たまに他の人と走るとついていけない。これじゃあだめだと思って、朝も毎日、上野の不忍池まで走りました。

陸上の練習が終わって、風呂にいくと、他の運動部が入った後だから、お湯は濁って、湯船の底は砂でざらざら。また、風呂から上がって食堂に行くと、何にも残ってないんです。お櫃ひつの底の麦飯を掬すくって食べてましたよ。自分でもよくやったなと思いますね」

高等師範の学生全員が参加する大宮マラソン、多摩川マラソンでは四年連続優勝。正月恒例の箱根駅伝にも出場し、山登りの五区を完走している。

「高等師範では、学校のレコードを破るとレコード賞というのが貰もえたんです。私は長距離の種目で五つ貰もいました。私の一級下にオリンピックでも活躍した短距離の吉岡隆徳君がいましたが、吉岡君は四つでした。それは、朝も晩も走り続けたお陰でしたね」

### 理論に基づく高等師範の教え

——高等師範の剣道についてお聞かせ下

さい。

「高等師範では、最初は全員無段扱いで、一年生の終わりに昇段審査をやって、高等師範の段を決めていました。武徳会三段だったのが四人もいましたが、初段に認められたのが十五人中二人だけ、あとは全員一級止まりでした。その初段のうちの一人が、中野八十二君でした。僕は陸上、中野君は水泳の選手でもあったから、揃って異端者扱いされたけど、私たちは兄弟のように仲が良かったんですよ」

学校独自の段位認定について聞いた。

「それは高等師範だけかと思っていたら、武専(武道専門学校)でも同じだったようです。昔は、先生方が自分の手でちゃんと教えて、段位をつける。そういう精神だったんでしょな」

次は稽古内容について伺いました。

「稽古は午後二時から五時までの二時間、全部の先生が出てこれ、稽古をつけてもらいました。

高野佐三郎先生は七十歳前ぐらいで、主任教授でした。私は毎日、先生に掛かっていきましたが、先生はぱつと構えて、じつとして動じないんです。私だけ剣先の前でぐるぐる回されて、どうにもこうにもならない。ふうふういいながら、『ありがとうございました』と言うのが精一杯でしたよ」

当時、関東と関西では、稽古つぷりが違ったという。

「武専、高師、国士館にそれぞれ剣風がありました。武専は大技で、担いで打つ。高師は応じ技で、応じて勝つ。国士館は突きから技を出して攻める。だから、道場で何百人一緒に稽古していても、あ





教職員大会で。前列左端・中野八十二氏、3人目・井上氏

れは武専だ、国士館だとすぐわかりましたよ」

高等師範には、他に理論家の菅原融先生、学生にとつて精神的な支えだった佐藤卯吉先生、森田文十郎先生と、錚々たる指導陣が揃っていたといふ。

「私は四年間、寒稽古にはいつも一番乗りでした。四週間続く寒稽古で、朝五時から始まるところを、四時半までには必ず行っていました。

それは、佐藤卯吉先生が、私が陸上競技もやることに、常に理解をもってくれて、いつも『心してやりなさいよ』と情けある言葉をかけてくれたからです。それが嬉しくて、ありがたくて、佐藤先生のためにも頑張ろうと、人より先に行つて稽古しました」

——高等師範の剣道で得たことは何ですか。

「剣道では名を残したものが何にもないんです。た

だ、卒業する時は四段を貰いました。それは、なんでも真面目に一所懸命やっているから、四段に認めようということだったんでしょね。剣道で誇りに思っているのは、初段から範士まで、すべて一度で合格したことですよ」

良い姿勢で、張りのある大きな声が続く。

「その頃、各府県の武徳会支部、高師、武専、国士館、警視庁と陸軍戸山学校だけは、それぞれで四段まで認めていましたが、五段からは武徳会でしか貰えませんでした。

私も高等師範を卒業した翌年、京都の武徳会に行きました。一週間講習を受けて、最後の日が昇段試験でした。講習会の稽古では、武専の先生が見て回って評価をされるんですが、それはもう、みんな一所懸命ですよ。

そして最終日、試験会場に行くと私の名ともう一人の方の名前が張り出されていて、横に『右両名受験に及ばず』とある。『受験に及ばず』って、受験させないってことですよ。これは大変だと思って、武専教授の佐藤忠造先生に、どういうことですかとお聞きしたら、『君は受験しなくても合格だ』と。これにはもうびつくりしましたね。稽古を毎日見て、先生方が力があると認めたんでしょう。高等師範の教えのお陰でしょね」

高等師範卒業後は、地元・福岡の筑紫中学へ。以降、剣道の指導者としての道を歩む。

——剣道の指導で大事なことは何でしょう。